

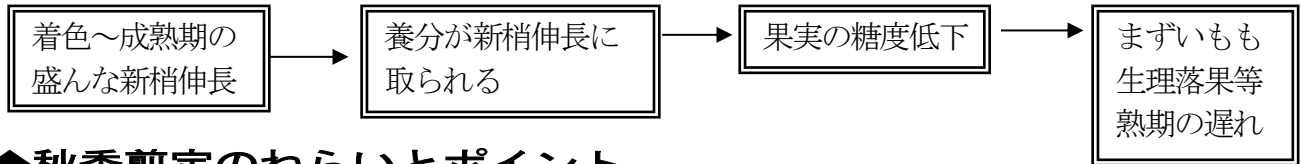
もも・ネクタリン秋季剪定及び園地管理講習会資料

令和8年9月

J Aグリーン長野営農販売部

◆おいしいモモは落ち着いた樹勢で生産される

1. 果実の着色～成熟期に新梢が盛んに伸びている状態では、そちらに養分が行ってしまい(栄養成長を続けて)果実の糖度は上がりにくく、着色も悪い。さらに成熟も遅れる。



◆秋季剪定のねらいとポイント

1. 樹を落ち着かせる

- ①秋季せん定は、一般的に強樹勢の場合などは、樹を落ち着かせる効果がある。
落ち着いた樹では、糖度の高い良質なももが生産できるほか、生理落果の防止となる。

落ち着いた樹勢とは・・・着色始めには新梢の85%停止しているもの。

※葉のある枝を切り取ると同化養分の供給が無くなり、樹勢が抑制され細根(秋根)は退化して翌春の生育が落ち着く。冬季剪定だと樹勢の抑制・細根の退化はなく、強樹勢⇒受精不良・核割れ・生理落果⇒糖度不良の品質低下を繰り返すことになる。

2. 効率的な貯蔵養分の蓄積

- ①もも栽培は、収穫から落葉まで一定期間があり、この間に来年の花芽の充実が図られる。
混んでいると花芽が不充実となるので、光を当て効率的に来年使う花芽を充実させることが必要。

3. 剪定後の枯れ込み防止

- ①もも等の核果類は太枝などを切ると傷口の癒合が悪く、そこから枯れ込みが入りやすい。しかし、秋季はまだ樹液流動があるので、枯れ込みが入り難い。

4. 防除効果を高める

- ①葉があるうちに剪定する秋季剪定は、枝の繁茂状態が良くわかる。
⇒冬季のせん定よりも、受光体制が良く見えるため、樹形の調整がしやすい。
②秋季のボルドー散布など薬剤防除効果が高くなる。

5. 注意点

- ①元々は密植主幹形の樹勢コントロールで導入された技術。栽植密度が広く適樹勢の場合、ハダニ等で落葉している場合は実施しないか、**徒長枝を切る程度とする。**
樹勢が弱い樹(古い樹)や、樹が損傷している場合(日焼け、胴部分の障害等)、また凍害が心配される場合は実施しない。
幼木は夏季管理を実施しておく事が重要です。※下部の枝が長大化する為。
②冬季せん定だけでは樹勢コントロールが困難な場合に実施するが、**切り過ぎは凍害発生を助長する。**

◆秋季剪定の方法

凍害の発生を抑制するため、剪定の程度は控える。薬液の掛かりが悪い場合は、葉を削ぎ落とす。

1. 対象となる主な樹

- ①主幹形・開心形を問わず、成木で樹勢が強く枝葉の繁茂した樹を中心に行う。
※弱樹勢樹は、枝が少ないため、もともと日当たりがよく、薬液も掛りやすい。さらなる樹勢低下につながるので、実施しない。

2. 実施時期

- ①芽が休眠に入り二次伸長しなくなる9月上旬～中旬が適期。
⇒早すぎると二次伸長。遅すぎると傷口の癒合が劣り、樹勢抑制効果が少ない。

3. ポイントと手順

混んでいる所や徒長枝の切り忘れ等を切り、日光を残す枝によく当て、明らかに来年必要のない太枝・車枝や日陰を作っている大枝で、切除する予定の枝の基部側の枝を切除する程度とする。

①園全体を見渡し、間伐・縮伐を検討する。樹と樹がぶつかって混んでいたら、残していく樹を決め、順次、間伐断行して作業性・日照性の良い園地にすることが大前提。

凍害抑制のため、縮伐は3月に断行する。

②1本、1本の樹の樹幹をみて骨格枝の配置を確認し、間引く太・中枝を決め、その枝の基部側の小枝を、太りを抑制するため切除する。また、樹冠上部で主幹等と競合する大きい側枝も同様にする。

太・中枝自体は、3月に切除する。

③次に発生角度の狭い徒長枝を切り取る。

④この位の剪定で枝葉の間から主幹が透けて見えるようであれば、後は冬季剪定（1月以降）で仕上げをするようにする。

⑤結果枝への日当たり具合(最低照度20%)を確認しながら軽い剪定にとどめる。

緑葉が貯蔵養分を作るのだから、切除し過ぎは凍害の発生や過剰な樹勢低下につながる。

4. 注意点

秋季剪定での切り過ぎに注意する。切り過ぎは凍害発生を助長する。

徒長枝を中心に切除し、太枝の切除は3月に実施する。

太枝の太りを抑制するため、徒長枝や基部の枝を切除しておく。

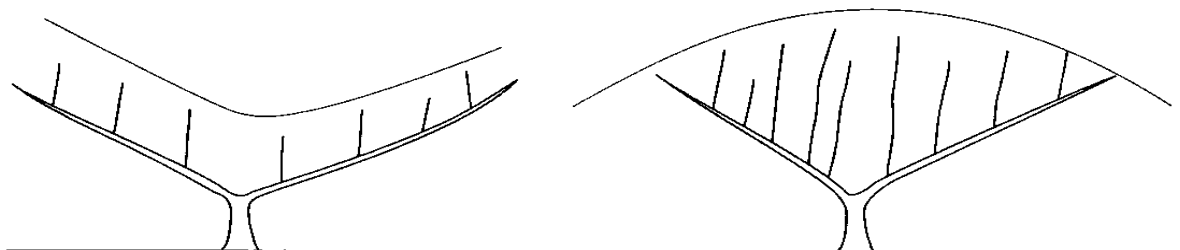
樹勢コントロールも必要だが、凍害発生を抑制する事を念頭に置く。

秋季剪定は、必要な樹・必要な部位のみに留める。

冬季せん定も年内は凍害の発生率が高まるため1月中旬以降とし、特に若木（6～7年生程度まで）は、2月下旬以降に実施する。

※自発休眠中のせん定は、望ましくない。自発休眠打破の目安は、1月1日頃です。

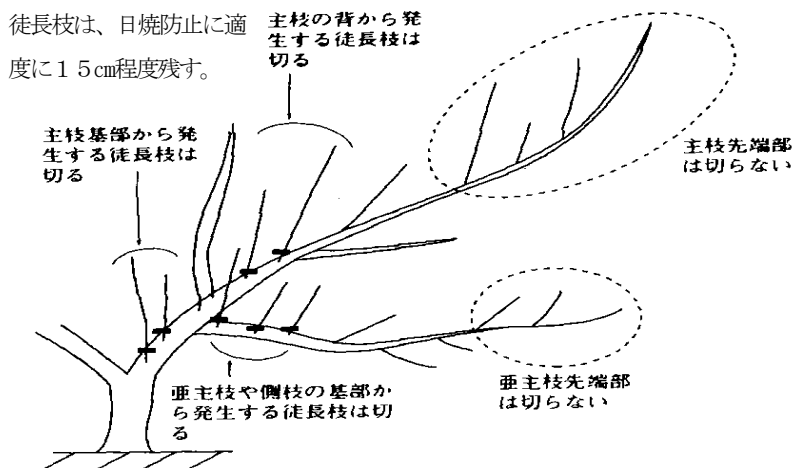
秋季剪定で缺せん定は行わない。のこぎりせん定のみとする。



良好な生育の樹
主枝の角度にあわせて徒長枝がV字に分布。
秋季せん定はほとんどしなくてよい

悪い生育の樹
主枝基部から強い徒長枝が出て山型になっている
主枝基部を中心にせん定する

生育のよしあしの判断と秋季せん定の判断



秋季せん定で切る枝

切り口には塗布剤を塗る！



◆礼肥・基肥は樹勢に応じて施用する ※もも・ネクタリン情報参照

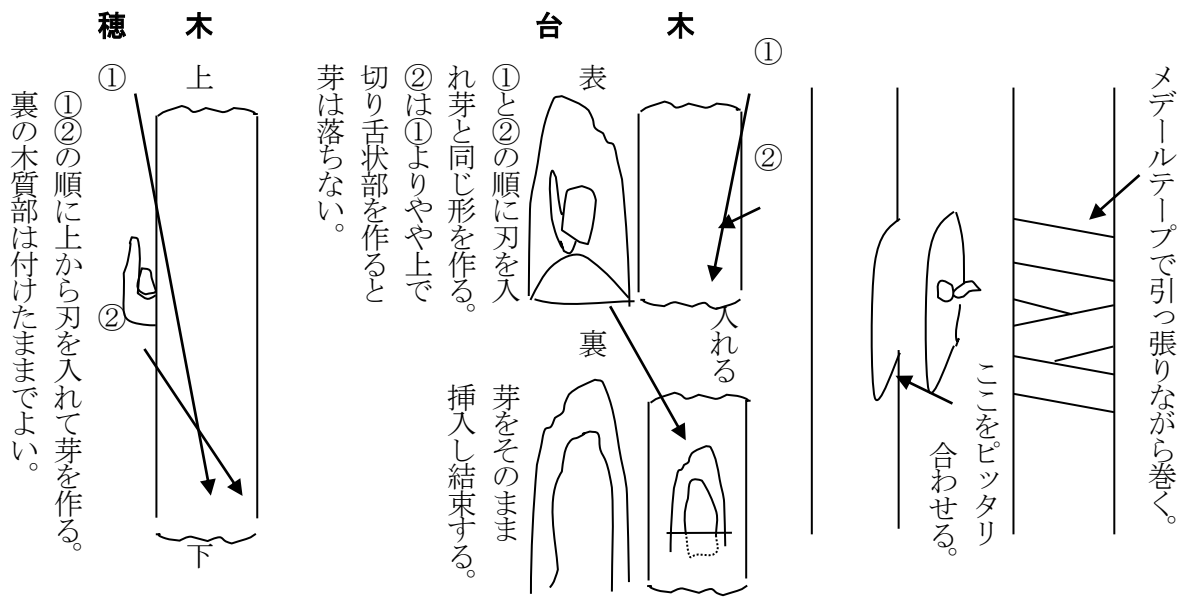
1. 樹勢の安定した園(樹)は秋の彼岸に礼肥を兼ねて年間施用量の20～30%を施し、残りは落葉後の基肥(10月下旬～11月上旬)に施用する。
2. 礼肥は、10～11月に吸収されて花芽の充実と貯蔵養分を高め、春先の発芽と同時に効いて徒長的伸長を抑え、有効葉数を袋掛けまでに確保できるようになる。
3. 礼肥は、有機物肥料を施用する。「有機専科」2袋/10a当を基本とし、ネクタリンは2割ほど多め。その他の肥料として天然ボカシ肥・なたね粕・ノルチッソ。なお、ノルチッソ以外は早めに施す。
※土壌診断でカリ過剰の園は、発酵ケイフン・天然ボカシ肥の使用は控える。
4. 土壌改良を目的とし、グリーン長野堆肥等堆肥の投入も行う。
ただし、窒素分が含まれるので、その分礼肥・基肥を減らす。
堆肥等を多く施用していない場合や、土壌分析の結果でリン酸や加里が過剰の場合は、基肥の果樹の力を10a当り1袋程度追加して施用するとよい。
5. 礼肥施用時期は9月中旬に施用する。
6. 樹勢が強く徒長遅伸びしている園地は基肥の施用を控える。
※自園の地力と樹勢を適確に判断して秋季剪定(間伐)に合わせて施肥量を減らすことも、うまいもも作りの重要技術になる。

◆芽接による更新

系統の良いものが各自の園又は地域にあると思われるので、収益性の低い品種・系統は早急に更新を図る。なお、樹齢の若い場合は次の要領で芽接による更新を行う。

1. 接穂は今年40cmぐらい伸びた新梢で、日光が十分当たり充実した新梢を選ぶ。
2. 桃形成層の細胞分裂は9月上中旬が最も活発であり、彼岸までに行う。
3. 方法
 - ①良く切れるナイフ(カッター)を使う。 ②接芽と台木の形成層(特に基部)を合わせる。
 - ③水が入らないようにテープでしっかり巻く。※接木専用のメデールテープ等を使えば芽と葉柄を包む事ができる。また、コスカシバ予防と翌春切らずにおけるので便利である。ビニールテープはくびれる場合があるので翌春カッターで切る。
4. 高接ぎの位置は幹に近い主枝・亜主枝上の1年枝の基部で、南面並びに伸長方向の背面または側面に接ぐ。1樹当たり5～10個所。
※更新方法には胴接ぎ更新もあるが、休眠期の3月頃に行う。(剪定時の穂木確保が必要)

《そ(削)ぎ芽接の手順》



◆コスカシバ対策の薬剤防除の実施 ※情報参考

コスカシバが依然として多く、来年度のために対策を行う。

ヤニや粗皮を落として、主幹部に農薬がかかるようにしておき、丁寧に薬液を掛けると、防除効果が大きい。

◆灰星病等果実腐敗病対策の実施

1. 樹上や園内に落果している被害果を土中又は園外に持ち出し、処分する。
2. 病原菌が被害果と被害枝で越冬する。剪定の際に枯死した枝はせん除し、焼却処分する。せん除後に園内へは放置しない。
3. 園内の環境では、日当たりの悪い園、過度の密植園、地下水の高い園や排水不良園では多湿条件によって発病が多くなりやすい。また枝が込み合っているような園では、薬剤散布の際に薬液の到達性がそこなわれるので、防除効果を半減させる結果となる。これらを積極的に改善する。

◆せん孔細菌病の防除の実施 夏型枝病斑と被害葉が多い枝は切除する。

せん孔細菌病はもも・ネクタリン栽培における難防除病害であり、細菌によって起こる病害で、果実被害や早期落葉が問題となる。**風当たりの強い園や地域では特に発生しやすく、水害地・湿害地も注意が必要。**特に9月からの台風による強風により感染が拡大しやすい。

1. ボルドーの散布について ※情報参照

- ①本年は発生が多かった。病原菌の撲滅のため、ボルドー液の散布を徹底する。
- ②被害の多い地区は、地域全体でボルドー液を今年は必ず4回散布する。(10月に2回)
被害の少ない地区でも、地域全体でボルドー液を今年は必ず3回散布する。
- ③しっかりと付着させるために、展着剤はK. Kステッカー又はアビオンEのどちらかを使用する。
K. Kステッカーは最後に調合。アビオンEは最初に調合。

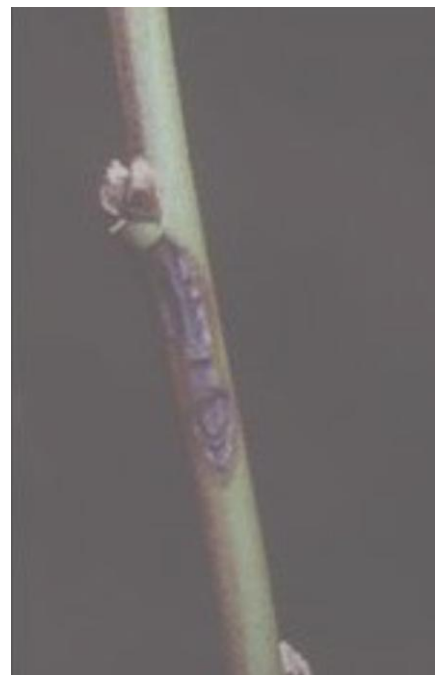
2. この時期の感染病条件

- ①病原菌は**秋期に新梢の芽や皮部組織に感染**し、病斑を形成することなく**越冬**する。
- ②枝への秋期感染は主に9月と10月の強い風雨によって起こる。
従ってこの時期に台風の来襲を受けた翌年には発病が多くなる。
- ③せん孔細菌病の病斑（伝染源）除去の実施について



本年伸びた新梢に発生をする夏型枝病斑の発生がある。

はじめ紫赤色の病斑だが、ひろがるにつれて紫黒色になってへこみ、枝に沿って縦長の病斑を形成する。



夏型枝病斑から飛散した病原菌は、**当年枝の皮目や落葉痕などで越冬して当年の伝染源になる**ため、これも剪除する。

特に、本年果実や、葉に感染が見られた付近を良く見て作業を行う。
ボルドー液散布前に実施する。散布後は見つけにくい。